

こども教育会議 会議録 (速記メモ)

<p>日時 令和3年7月28日(水) 13:30~14:30</p>	<p>場所 武雄市役所 災害対策本部室</p>	<p>出席 小松市長、松尾教育長、大庭教育長職務代理者 教育委員(馬場、山口、牟田、岡本、田中、大渡、井手) 秋月こども教育部長、諸岡こども教育部理事 教育総務課(木村課長)、学校教育課(森主幹) 山口環境部長、環境課(原課長、永尾課長代理) 庭木企画部長、企画政策課(弦巻課長、中村係長、西村)</p>
<p>1. 協議件名</p>		<p>第26回こども教育会議 (子どもたちが行うゼロカーボンの取り組みについて)</p>
<p>議事録</p>		
<p>内容</p>	<p>1 開会(進行:庭木企画部長)</p> <p>2 議事(議事進行:小松市長)</p> <p>(1)子どもたちが行うゼロカーボンの取り組みについて</p> <p>①話題提供</p> <p>武雄市が2050年までに市域の温室効果ガスの実質排出量ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ in たけお」の取り組みについての説明と市内各学校での環境問題に関する取り組み状況の報告を行った。</p> <p>②意見交換</p> <p><出席者の意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・まずは自然に目を向けることが大切。我々は自然に生かされていることを忘れてはいけない。子どもたちのお手本となるべく、まずは大人がその姿を見せる必要がある。例えば、エコバックやマイボトル、ペーパーレス、ゴミの分別など、大人の視点からきちんとできているか、自分自身を見直すことが必要である。 ・エアコンなど便利さ、快適さの裏側にゼロカーボンがあり、大人でも難しい問題だと感じる。難しいからこそ、武雄市としてゼロカーボンをどう考えているのかを子どもたちに分かりやすいかたちで発信していくべき。我々が発信することと、それを教育現場が受け取ることが教育の一環である。発信方法の一案として、例えば、学校にデジタルサイネージを設置し、子どもたち向けの市役所だよりを発信するなどよい。 ・エアコンだけでなく、例えばカーテンを閉める、窓に遮熱フィルムを貼るなど、体に直に感じる暑さ・寒さ対策は子どもたちにとって身をもって学べる良い方法だと思う。 ・武雄市は教育大綱「組む」を掲げているため、学校だけではなく、地域や機関とも連携して森林開発、バイオエネルギー、テレワークなども推進していき、ゼロカーボンに取り組む必要がある。 ・各学校でさまざまな取り組みを行っているが、市が枠組みを示したほうが行動しやすいと思う。子どもたちの行動が大人の行動を変える。 ・みんなが取り組んでいく意識、実践、習慣が大切。そのためには、家庭、学校、地域社会の連携や協力が必要。低学年の子どもたちはまず家庭から。家族と一緒にゴミの分別を学ぶなど。中学年の子どもたちからはリサイクルについて学ぶ、高学年の子どもたちはゼロカーボンに取り組む理由や背景について学ぶなど、学校での学習も合わせながら発達段階に応じた理解を深めて実践できることを増やしていく。また、中学生になったら実際に環境保全やボランティアで実践するなど。そのためには、教育課程への位置づけが大切。 ・自分たちが自然の一部であるという考えが基本。身近な生き物を観察したり、本などで世界の状況に目を向けたることで地球の今を知ることが大事。子どもたちが自分で学んだことを伝え、話し合う場を設けるのもよい。 ・ゼロカーボンは遠い存在ではなく、無駄を無くすなど身近なことだと考えたとき、大きな可能性を秘めているものだと感じた。武雄市は緑もあるが、都市化も進んでいるため、調和が取れており、ゼロカーボンが取り組みやすい。このような武雄市だからできることを考えるのもよい。キャンプやアウトドア、公園整備に力を入れつつ、ICTなどにも取り組んでいるので、自然を大事にしつつ、最新の情報を得られる環境が整っている。 	

- ・ゼロカーボンを考えてとき、日本古来の四季が無くなっていくことは悲しいと思った。四季を感じさせる文化や行事、食文化を大人が発信していくべき。
- ・学校において、例えば今日の気温を出したとき、50年前や100年前の気温はどうだったのかを調べるのも面白いと思う。そして、定期的にゼロカーボンを考える日を作ってみる。また、各小学校で世界のゼロカーボンの取り組みを学び、中学校になれば学校同士で学んだことをプレゼンしてもよい。
- ・「ゼロカーボンを考えるクラブ」とか、意識がある子どもたちが自主的に集まって学ぶ場を提供するのもよい。大人が全部考えてあげるのではなく、子どもたち自身に考える力を付けさせたい。
- ・最近、公民館が賑わっていると感じる。そこを上手く活用して、ゼロカーボンをいろんな世代で考えるきっかけに作っていくのもよい。
- ・幼稚園や保育園の段階から自然に触れるような体験型学習を行い、小学校でも私たち大人世代の頃にはなかった環境学習が各学年に応じて取り組まれている。子どもたちが学んだことを保護者に伝えたり、教材を持ち帰って一緒に考えたりする機会が少しでもあればよいと思った。
- ・中学生や高校生でもハイレベルな課題研修を行っており、このような取り組みを地域に発信していくべき。
- ・使用する資料もデジタル化することで、紙の削減にもなるうえ、家庭で一緒に学習でき、保護者の理解も進む。
- ・武雄市は宇宙科学館もあるため、さまざまな機関と連携することもできる。
- ・大人がこれまでやってきた役割から、子どもたちのこれからの行動変容をどう促していくのか。みんなでやるということを教育の中で訴えていく必要がある。
- ・ゴミ箱を置かない、プリントの裏紙を計算用紙に利用するなど取り組みは早くから行われている。学校で行っていることを家庭でも行ってみる。
- ・保護者の学校への自家用車での送迎も必要最低限にして、自分の足で歩くことも自然環境を変えるきっかけになるということを保護者の理解を得ながら取り組んでいく必要がある。
- ・ゼロカーボンは50年、100年と継続していくべきであるので、無理な行動計画は立てずに、身近なことや気軽にできることを中心に、武雄市らしい行動計画を策定されることを願う。
- ・ゼロカーボンという言葉について改めて調べてみたら、昔から自分がやっていたこともあったし、武雄市でも既に取り組んでいることでもあった。大人の気づきから子どもたちに気づかせるためには、子どもたち同士で話し合う、家庭で話し合うことも大切。大人も身近なことだと感じることで、自分のことと思える。
- ・子どもたちの気持ちを変えるのは、ゼロカーボンの知識の習得だけではなく、道徳や学級活動の中で話し合いをすることである。
- ・ゼロカーボンに関する授業参観を行う必要がある。今後は家庭との連携を考慮していきたい。
- ・今後自然災害が起こった際は、それに関連させて地球環境についての授業を行いたい。

<市長の発言>

- ・机上だけで学ぶのではなく、野外活動や森林教室などを通して体験、体感することが大切だと感じた。また、市内中心部に「緑」を増やすことも大事。今後私たちが行う会議もペーパーレス化を行い、自分たちもできることからやっていくべきである。
- ・人間は自然の一部である。「知る」こと、「体験する」ことが大事。知るためには、しっかり発信していく。体験は、野外活動、友達同士や親子で調べるなど、広がりのある学びが必要。家庭や地域と連携しながら、家庭でも親子で学べる環境を作るべきである。
- ・武雄市に今あるものをもっと活かして、組み合わせる。新しい取り組みよりも、既に行っていることを横に広げる。私たち大人も学びあっていく必要がある。今日の意見をゼロカーボン計画策定の参考としていきたい。

3 閉会(進行:庭木企画部長)